

乳幼児にとってのおもちゃの役割についての研究

— 機能遊びから象徴遊びへそして実物志向へ —

Study on the Role of the Toy for Infant

— From Functional Play Through Symbolic Play, and to Real Thing Thought —

高井 芳江 *Yoshie Takai*

(人間発達学部)

村田 尚子 *Naoko Murata*

(名古屋市天白区野並保育園)

野原 由利子 *Yuriko Nohara*

(名古屋芸術大学名誉教授)

第1章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的

- 1) 0歳から2歳の感覚・運動器官とその機能が飛躍的に発達する時期には視覚・聴覚・触覚などの発達を促すおもちゃが大きな役割を果たす。

この共同研究では、機能遊びとして使われるおもちゃを月齢・年齢の順を追いながら、例示・作成につとめ、子どもの活動の様子を観察する。

- 2) そして、1歳半頃から、子どもたちは単に機能を発達させるためだけでなく、見立て・つもりなど想像的・象徴的な思考が芽生えはじめるとともに、おもちゃを想像遊びの中で使うようになってくる。

この共同研究の目的の一つは、機能遊びとしてのおもちゃ遊びが、想像遊びに使われるようになっていく過程を観察し、そして想像遊びを促すおもちゃにはどのようなものが望ましいか、実際の子どもたちのおもちゃ遊びの観察によって把握することを試みることである。

- 3) J. ピアジェは、思考の発達について、0～2歳は感覚運動的水準、2～4, 5歳は象徴的思考段階、4, 5歳～7, 8歳は直観的思考段階、7, 8歳～11, 2歳は具体的操作思考段階、11, 2歳から成人に至り、形式的操作思考、すなわち文字や数字を駆使して抽象的思考が可能になってくるとしている。

ごっこ・役割遊びなどの象徴遊びは、具体物を実現させたいという意欲を産み、積み木やブロックなどの構成遊び、つくる遊びの発展を産み、また、一定の役割やルールを守らなければ遊びがなりたたないため、次第にルールのある遊びも醸成し、楽しめるようになっていく。

- 4) M. モンテッソーリは、2歳頃から、遊びの他に、「玩具」ではなく、日常生活力を養う「用具」を実際に使用する活動を重視している。

日常生活用具にしっかりと関わる「対象的行為」は、事物に実際に触れる中で事物を正確に認識していくために大切であると思われる。

- 5) また、M. モンテッソーリは3歳半頃から、外界の混沌とした印象を整理してみることを目的とする「感覚教具」に触れて、感覚を練磨しながら、感覚を通じて正確な認識を育むことの重要性を提唱している。

どのような「日常生活用具」や「感覚教具」を提唱しているのかを知り、実際の子どもの姿も観察してみたいと思う。

第2節 研究の方法と手順

以上の研究目的を果たすために、文献法、観察法により、以下の手順で作業を進めて行く。

- 1) 乳幼児0歳から7, 8歳までのおおよその発達のすじ道を、J. ピアジエ、M. モンテッソーリ、そして日本の先行研究により把握する^(注1-1)。
- 2) おもちゃの意義に関する先行研究を学ぶ。
- 3) 0～2歳頃までの機能遊びを促すおもちゃを、発達に即して例示・作成し主なものを写真で示す。
- 4) 0～2歳児の諸機能を育てるおもちゃで遊ぶ様子を、撮影し、記録する。
- 5) 1歳半～4歳頃までの象徴遊びを促すおもちゃを、発達に即して例示し、主なものを写真で示す。
- 6) 1歳半～4歳児のごっこ遊び・構成遊びの様子を撮影し、記録する。
- 7) モンテッソーリ教育導入園で行っている2歳頃から行う、「日常生活練習」にはどのようなものがあるのか調べ、活動する子どもの姿を撮影し、記録する。
- 8) モンテッソーリ教育導入園で行っている3歳半頃から行う、外界にある形、大きさ、長さ、色、重さ、質感、音などを、対にしたり、比べたり、仲間集めをしたりして整理、認識していく「感覚教具」にはどのようなものがあるか調べ、活動する子どもの姿を撮影し、記録する。

第3節 研究の内容

以下のように研究を進めていくこととする。

第2章 乳幼児の発達と保育の在り方について

第3章 0～3歳頃までの諸機能の発達とおもちゃの役割について

第4章 2～4歳頃までの象徴活動の意義とおもちゃの役割について

第5章 北名古屋市東子育て支援センターのおもちゃ

第6章 ごっこ遊びへといざなうおもちゃの作成と実践

第7章 野並保育園（名古屋市天白区社会福祉法人立、園長 加藤清文）の3歳児の象徴遊

びの実践

- 第8章 ごっこ・役割遊びから、構成遊び、つくる遊び、ルールのある遊びへの発展について、しおみが丘保育園（名古屋市緑区「幼保連携型認定こども園」 園長 酒井 教子）の実践紹介
- 第9章 事物を正確に認識するための「対象的行為」を育み、生活の自立を援ける日常生活練習用具について
- 第10章 事物を正確に認識することを援けるためのモンテッソーリ感覚教具について

〈第1章 注1-1 参考文献：J. ピアジェ『知能の心理学』1947

波多野完治、滝沢武久訳 みすず書房 1967

M. モンテッソーリ『モンテッソーリ・メソッド』1909

阿部真美子・白川蓉子訳 明治図書 1973)

第2章 乳幼児の発達と保育の在り方

「保育所保育指針」では、乳幼児の発達と保育の内容について、大略以下のように示している(注2-1)。

乳児の発達と保育については、「視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。」

1歳以上3歳未満児の発達と保育については、「歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で行うようになる。発声も明確になり、語彙も増加し、自分の意志や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。」

3歳以上児の発達と保育については、「運動機能の発達により、基本的な動作が一通りできるようになる。理解する語彙数が急激に増加し、知的興味や関心も高まってくる。仲間と遊び、仲間の中の一人という自覚が生じ、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになる。これらの発達の特徴を踏まえて、個の成長と集団としての活動の充実がはかれるようにしなければならない。」

以上の指針を踏まえながら、とりわけ急速に需要の拡大している3歳頃までの保育について、多くの研究者や実践者が各地でより豊かな保育の創造を探究している(注2-2)。

乳幼児期の発達と保育の在り方について、知性のみならず情緒、感性を含めた全体的な視野を持つことの重要性を認識しつつ、本研究ではJ. ピアジェの、乳幼児の思考の発達

段階説に焦点を当てて、遊びの発達とそこの中でのおもちゃの役割について考察してみたい。

〈第2章 注2-1 厚生労働省「保育所保育指針」（平成29年告示 平成30年4月適用）

注2-2 太田早津美・酒井教子他『乳児保育』青翰社 2017 等）

第3章 0～3歳頃の諸機能の発達とおもちゃの役割

第1節 0～2歳：感覚・運動的知能水準とおもちゃの役割

ピアジェは、0～2歳の知能の特徴は、「感覚・運動的水準」とした。

この期には、感覚・運動器官とその機能が飛躍的に発達する時期であり、体・手・視覚・聴覚・触覚等の発達を促すおもちゃが大きな役割を果たす。

機能遊びで育まれる力について、瀧薫は次のようにまとめている^(注3-1)。

- ①手指を使って身の周りにはたらきかけ自分と周りの世界を知る
- ②自我の芽生えを支える ③つまむ、通す、ひねるなど、多彩な手指の機能が育つ
- ④道具を効果的に使う ⑤手と目の協応が育つ ⑥手先の巧緻性が育つ
- ⑦根気や集中力が育つ ⑧表現力、創造性が育つ ⑨数や図形概念等が育つ
- ⑩気持ちが安定する ⑪言葉が育まれる

第2節 諸機能の発達に役立つおもちゃの例

① ドイツ玩具

F. フレーベルの祖国であるドイツでは、フレーベルの「恩物」の思想の伝統を引き継ぐ玩具の考案・作成が盛んである。ドイツ玩具には、

- 1) 0～2歳の機能遊びに役立つもの
- 2) イメージを描き、手で表現してみる、象徴遊びに役立つもの
- 3) 複数の子どもたちで、手を使うゲームを楽しめる、ルール遊びに役立つもの

などがある。 (文末写真1)

② 野並保育園、乳児の諸機能の発達を促す手作り玩具 (文末写真2)

③ 乳児の諸機能の発達を促す身近な材料による手作り玩具 (文末写真3)

④ 機能遊びをする乳児の姿 (文末写真4)

〈第3章 注3-1 瀧薫『保育とおもちゃ』エイデル研究所 2011 pp. 30-34)

第4章 2歳～4歳頃までの象徴活動の意義とおもちゃの役割

第1節 2歳～4歳：象徴的思考段階とおもちゃの役割

ピアジェは、2～4歳期は、象徴的思考が芽生え発達するとした。

見立て・つもりなど想像的・象徴的な思考が芽生えはじめるため、見立て・つもり遊

び、手遊び、ごっこ・役割遊びなどの象徴遊びを盛んに行うようになる。

見立て、ごっこ遊びで育まれる力について、瀧薫は次のようにまとめている^(注4-1)。

- ①愛情の体験を確認する ②ファンタジーの体験
- ③言葉を使ったコミュニケーション能力が育つ
- ④生活に必要な知識や知恵を体得する
- ⑤自分と周りの人との存在を認識し社会性が育つ
- ⑥物事の本質を知り概念化できるようになる ⑦表現力、創造力が育つ
- ⑧心情の発露：負の体験や理解しがたい体験を発露することで、子どもなりに折り合いをつけている、生き抜く力にしていることもある

第2節 フレーベルの「恩物」の意義

F. フレーベルは、1838年、子どもたちが楽しく遊びながら、表現力や認識力、想像力を自然に学べるような教育玩具“Gabe”（日本語訳「恩物」）を創案した^(注4-2)。

日本では一般的に、第1恩物から第10恩物までを「恩物」、第11恩物から第20恩物までを「手技工作」として区別している。

第1恩物：球＝赤・青・黄・緑・橙・紫の6色の柔らかな鞠

第2恩物：立体三体＝球1・円柱1・立方体1

第3恩物：立方体の積み木

第4恩物：直方体の積み木

第5恩物：立方体・大三角柱・小三角柱の積み木

第6恩物：立方体・直方体の積み木 (以上 立体の理解)

第7恩物：面の理解＝正方形と三角形の色板

第8恩物：線・直線の理解＝5種類の木の棒

第9恩物：線・曲線の理解＝金属製の環

第10恩物：点の理解＝豆または小石

手先を使いながら、イメージを表現したり、認識を深めたりすることができ、今日も幼児の象徴的思考を育む時期に使用する意義のある玩具である。

第3節 象徴遊びを育ぐくむおもちゃの例

- ①フレーベルの「恩物」 (文末写真5)
- ②ままごと用のおもちゃ (文末写真6)
- ③ブロック・積み木など (文末写真7)

〈第4章 注4-1 瀧薫 前掲書 pp.68-71

注4-2 『フレーベル全集』全4巻 『幼稚園教育学』玉川大学出版部 1981)

第5章 北名古屋市東子育て支援センターのおもちゃ

日本の子ども・子育てをめぐる様々な課題を解決するために平成24年8月「子ども・子育て支援法」が成立した。北名古屋市では地域子ども子育て支援法に基づき、4か所の子育て支援センターを開設した。親子の遊びを主に、体操やふれあい遊びを楽しみ、子育てに関する悩みや喜びを共有する場となっている。

第1節 機能遊びのおもちゃと子どもの姿

「乳児保育Ⅱ」では、養護と教育の一体性を踏まえて、遊びと保育の方法及び環境について理解する為、北名古屋市東部の子育て支援センター「東子育て支援センター・こあら」を訪問した。学生は時々訪問して交流を図っている。見学の一回目は以下の通りである。

1) 支援センターの室内環境・おもちゃの観察

子育て支援センターに遊びに来る子どもは0歳から3歳が多く、保育士が手づくりしたおもちゃで遊ぶ。手指の操作を楽しむ「ボタンかけ遊び」はフェルトのボタンかけをして長くつないでいく(写真8-1)。「隠れ遊びうちわ」はうちわに書かれた動物の変化を喜ぶ(写真8-2)。「洗濯ばさみ遊び」は手指の操作でカラーの板に洗濯ばさみを挟む(写真8-3)。チェーンリング落としはつまんで穴に落とす(写真8-4)。「カラーリング」は積み重ねたり転がして遊ぶ(写真8-5)。「玉おとし」はボールが転がる変化を追視し、楽しんで遊ぶ(写真8-6)。

2) 子育て支援センターに来ている親子と交流

広い室内はキルティングのカーペットを敷いた赤ちゃんコーナーがあり、赤ちゃんと母親がゆったり過ごせるようになっている(写真8-7)。緩やかな傾斜があるハイハイコーナー(写真8-8)、機能遊びのコーナー、象徴遊びのままごとコーナー(写真8-9・10)、構成遊びのブロック・パズルコーナー、絵本コーナーなどが設置されている。それぞれの遊びコーナーでは自ら選んで取り出せるようになっている。月齢によってふさわしい遊び、興味の持てるコーナーが設置されている。

第2節 機能遊びからごっこ遊びを育てるおもちゃ・用具と子どもの姿

第二回目の訪問では、各自考え、製作した手作りおもちゃを持参した。生後3～4か月から3歳の子どもたちが、母親と参加し、親子づれの和やかな交流が生まれていた。

学生が持参した、0歳児用おもちゃの「編み物キャンディー」(写真8-11)はカラフルで、口に入れても危険でないもの、洗濯できるものである。0歳児は手を伸ばしてつかんでいた。また、「デンデン太鼓」は振ると音が出て楽しめるものである(写真8-12)。0歳児は興味を持って、音のする方を振り向いていた。1歳児・2歳児用おもちゃは、1歳児はフェルトで作った「動物カード」(写真8-13)や「紙パック6面体パズル」(写真8-14)で遊び、フェルトで作った「トンボのホックはめ」は2歳児が手先を動かしてはめ

ていた（写真8-15）。

「東子育て支援センター・こあら」（写真8-16）には、その他、赤ちゃんがゆらゆら揺れる「布ブランコ」（写真8-17）、「アンパンマンハウス」（写真8-18・19）、「凱旋門」（写真8-20）などがあり、身体を動かして遊べるように環境が整っている。（文末写真8）

第6章 ごっこ遊びへといざなうおもちゃの製作と実践

2018（平成30）年度改定の「保育所保育指針」及び「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では乳児、及び1歳以上3歳未満の保育に関する記述の充実がされている。これは多くの保育所で0・1・2歳の子どもの入所が増え、乳幼児保育の研究も盛んに行われるようになったためと、0歳児、1歳児、2歳児の保育の質が、その後の成長に大きく関わることが、日本だけでなく各国の研究で明確になったためである。

先行研究より、乳児保育におけるおもちゃのあり方を探る。前林の「乳児保育におけるおもちゃの意義と学び」^(注6-1)では「乳児保育の授業で手作りおもちゃを作成の際、発達段階に応じた子どもの感覚機能や認知機能、運動機能、社会性の発達などについて考慮するだけではなく、手作りおもちゃを通じて人と人のふれあいや情緒的な感情を育む大切さを学ぶことが重要である」と述べている。

多田「子どものおもちゃと遊び」^(注6-2)では「第一に、コミュニケーションを豊かにしてくれるおもちゃを尊重すること。第二に、遊び終わったら見えるところに飾っておきたくなるおもちゃ、インテリア・トイ」を推奨している。「遊び力の中には、人と関わる力、ユニークなものを生み出す創造力、いろいろなものに興味関心を持つ探究心など、多くの力が内包されている。自然環境や自然物などグッド・トイやグッド・プレイスが人間力を磨くものになる」とある。

先行研究にある乳児のおもちゃの意義を踏まえ、保育者を目指す学生が実習や保育者になって保育に生かせる完成度の高い手作りおもちゃを製作した。また、製作したおもちゃを使って、言葉のやり取り、コミュニケーションを深めるための使い方・演じ方を演習した。機能遊びから象徴遊びへの発達を援助するおもちゃの検討をすることを目的とした演習を報告する。

第1節 「乳児保育Ⅰ」で取り組んだ玩具の製作とその意義を踏まえる

手作りおもちゃを製作するにあたって、保育の場で必要なおもちゃとはどんなものであるか考えた。第一に、子どもの発達を促すものであり、手先の微細な運動、及び身体の運動発達を促すものである。第二に、知的な刺激（思考力・創造力・想像力）を与えてくれるものである。第三に、自然素材のものは心地よさを与える。第四に、色の美しいもの（自然素材の美しさ・美的感覚を養う）である。

生後6か月を過ぎた乳児は目の前にあったぬいぐるみを保育者の後ろに置くと、どこに

行ったのかと見まわす。生後8か月を過ぎた子は、ハイハイして保育者の後ろに行き探すこともできる。このように見える世界だけでなく、見えない世界にも興味がわいてくる。乳児はいないないばあ遊びが大好きである。保育者がハンカチで顔を隠し、「ばあっ」と顔を出すと喜ぶ。その繰り返しを通じて、乳児はハンカチの向こうには保育者の顔があると思い描くことが出来るようになる。

今回の製作の人形は乳児が箱の中（紙パック・ペットボトル使用）から何が出てくるのかと想像することから始まる。「ばあ！」と出てくる不思議さ・愉しさを誘うものである。保育者が棒（菜箸使用）を操作して人形が出てくるが、人形との会話も心通い合うものでありたい。製作する人形は学生各自が選んだ動物・人間（協力「手づくり工房れい」）を完成させたものである（写真9-21・22）。

第2節 完成した人形を使用しての演習

学生が製作した「いないいないばあ」人形（写真9-23）も、そうした「隠れ遊び」の愉しさを取り入れたものである。隠れている箱の中から人形が出てくることに期待を持ち、待つ。人形を動かし、名前を呼ぶと、動物から呼ばれたと思い「はい」と返事をする。こうして、楽しみながら言葉を引き出すことが出来る。

人形を完成させた（写真9-24）翌週は各自が計画書（目的・見せる対象年齢・人形を使って遊ぶ時間・内容など）に沿って、大学内保育室「子どもコミュニティセンター」で演習を行った（写真9-25）。7～8人のグループに分かれて、学生同士で発表し合い、最後にグループの代表が、皆の前で発表した。演じる際には、クマを製作した学生は「森のくまさん」の歌を導入していた。また、絵本の読み聞かせをする前に人形が登場することもある。人形を二つ製作して、両手に持って人形が掛けあって、会話を進める者もいる。

筆者がしおみが丘保育園（写真9-26・27）で演習した際の1歳児は人形が顔を出すと喜び、2歳児（写真9-28・29・30）からは返事が返ってきたり、人形と「にらめっこ」をして遊ぶことが出来た。生き生きと人形との対話を楽しむ子どもたちであった。

（文末写真9）

〈第6章 注6-1 前林英貴「乳児保育におけるおもちゃの意義と学び」、『人間と文化』2017 pp.145-151

注6-1 多田千尋「子どものおもちゃと遊び」、『東南アジア子ども交流プログラム報告書』2012 pp.38-42

参考文献：今井和子『遊びこそ豊かな学び』ひとなる書房、2014

マルギッタ・ロックシュタイン『遊びが子どもを育てる—フレーベルの幼稚園と教育玩具—』福村出版、2014

江口裕子他『モンテッソーリ教育・0～3歳までの育ちと手助け』

学研、2014 第10刷）

第7章 野並保育園の3歳児の象徴遊びの実践

3歳児の子どもたちは、社会性の育みがスタートし、「友達と一緒に！」という思いが芽生えはじめる時期である。模倣期が盛んな1～2歳児の時期は、身近な大人の姿を見ているが、まだこの期は見立て遊びの段階であり、未熟な過程であるが、模倣期は子どもの成長における大切な基盤である。

2歳頃から、見立て遊び、つもり遊びを通して子ども同士の関わりが見られるが、まだ、言語のやりとりやイメージを共有していくのは難しい段階で、ままごと遊びの様子でも「お茶どうぞ」「ありがとう」という応答性はなく、一方的なやりとりである。

3歳児になるとどこにいても、ごっこ遊びがスタートしていく。園庭に設置されている小人のオブジェを見つけて、4～5人の友だちと、小人を赤ちゃんに見立てて、ミルクをあげたり、身体を洗ってあげる仕草を見せながら、「赤ちゃんだから、優しくしてあげてね」「ミルクおいしい?」「ごはん作ってあげる」と言いながら、そばに落ちている石や落ち葉を道具にし、友達とイメージを共有している姿がとても微笑ましく、まさしく象徴遊びの敏感期といえる姿が見られている（写真10-1）。

野並保育園の3歳児保育では、「コーナー遊び」「モンテッソーリ活動」「戸外遊び」や「リズム遊び」などを柱にして取り組んでいる。コーナー遊びでは、象徴的な遊びとしてブロック遊び、粘土遊び、お絵かき、ままごと遊びを取り入れている（写真10-2・3・4・5）。

ごっこ遊びや構成遊び（写真10-6・7・8）など、日々取り組んでいる象徴遊びをどの様に次の過程につなげていくのか？ 子どもたち自らの力で、友達とイメージを膨らませて共有していく楽しさは、子どもたちの新たな扉を開けていく事となっているが、子どもが主体となる生活へと導いていく為に、実物志向への活動として「モンテッソーリ日常生活練習」を通して事物を正確に認識する為に「対象的行為」の育みを大切にしている。

ごっこ遊びでの3歳児の子ども姿では、子ども同士の言葉のやりとりも盛んになり、「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」「どれにしますか?」と言葉の意味を理解し応答性を持ったやりとりをしていく中で、ごっこ遊びが、より展開していくのであるが、象徴的段階で終わってしまう事のないように3歳児の保育を丁寧に見ていく事が、課題であると感じている。

例えば、子どもたちにとって恐竜は人気であり、ブロックを使い「恐竜できた!」「イグアナドンだよ」「肉食だよ」と目を輝かせ得意そうに話してくれる。

いつも、コーナーでは「モンテッソーリ文化教具」でもある恐竜のフィギアと写真カード、恐竜図鑑を見る事が出来るので、より恐竜へのイメージをふくらませていく事で、豊かなブロック遊びにつながっている（写真10-9・10）。イメージを共有するだけでなく、友達と恐竜への関心をより深め、広げていく喜びも味わっている姿は、象徴遊びでの姿では見られないと感じている。

「お世話ごっこ」「お母さんごっこ」では、身近な存在であるお母さん役になりたいという子どもたちの思いが、ごっこ遊びに展開されていくが、『お母さんへの憧れ』は、子どもたちの内面から溢れる『自立』に向けてのサインのように受け止めている。

ままごとの世界だけではなく、日々の生活の中で子どもたち自身の力で自立に向けた豊かな生活につなげていく事も大切な課題となっている。自立に向けて思い通りに動く子どもたちの手、指を作っていく事で、自分の事は、自分で行っていく満足感、自己肯定感にもつながっていく。本物志向に移行していく「モンテッソーリ日常生活練習」、五感を洗練しながら、外界を正確に認識していくことを援ける「感覚教具」も適切に取り入れながら、様々な遊びを融合して子どもの成長をはかれるよう、さらに考察と実践を深めていきたいと感じている。（文末写真10）

第8章 ごっこ・役割遊びから、構成遊び・つくる遊び、ルールのある遊びへ

第1節 ごっこ・役割遊びから、構成遊び・つくる遊びへの発展

例えば、はじめは赤ちゃんの世話などの簡単なおっこ遊びから、次第にお家ごっこに発展し、必要なものを作っていく。大型積み木でお風呂をつくったり、ダンボールでガスコンロを作ったり、宣伝紙をハサミで切ってスパゲッティ、失敗コピー紙を細切りしてざるにのせ、おそばなども作りだす。透明のプリンカップの中に茶色の色紙を貼ってそばつゆに見立て、割り箸を添えて“客”に出すなど様々な工夫をする。

第2節 構成遊びで育まれる力

積み木遊びで育まれる力について、瀧薫は次のようにまとめている^(注8-1)。

- ①表現力、創造性が育つ
- ②問題解決能力が育つ
- ③身体の諸器官が発達する
- ④科学的、数学的概念が育つ
- ⑤自主と協調など、社会性が育つ
- ⑥根気や集中力が育つ
- ⑦豊かな情緒や感性が育つ

第3節 ごっこ・役割遊び、構成遊びから、ルールのある遊びへの発展

ごっこ・役割遊びはそれぞれの子どもたちが一定のとりきめを守って振る舞わなければ面白く続かない。構成遊びも一定の手順をふみ、守らなければ、物は作れない。ごっこ・役割遊びや構成遊びは、自然に遊びの中で、ルールを認め、従うことが要求されるので、ルールのある遊びも楽しむことが可能になっていく。

ルールのある遊びで育まれる力について、瀧薫は次のようにまとめている^(注8-2)。

- ①社会性が育つ
- ②根気や集中力が育つ
- ③負の体験ができる
- ④推理・言葉の力・数の力・瞬発力など幅広い力が育つ
- ⑤個性が発揮される
- ⑥遊びの経験を応用して自分たちでルールを作りだす

- ⑦連帯感が育つ
- ⑧失敗から学び工夫する力が育つ
- ⑨楽しさを共有する体験

第4節 ごっこ遊び、構成遊びを楽しむ子どもの姿

しおみが丘保育園の実践紹介

「しおみが丘保育園」は名古屋市緑区の住宅地にある「幼保連携型認定こども園」である。園舎の周りを、さくらんぼ、びわ、なし、りんご、かき、みかんなどの果樹が囲み、園庭の一隅には、大根、ニンジン、ピーマンなどの畑とビオトープ、屋上には太陽光パネルがあり、園の電気は自然からも得ている。保育者たちの、命を守り育ててくれる自然環境を子どもたちに伝え続けたいとの思いが伝わってくる。建物や室内の家具、遊具、玩具も木製のものが多く、美しく落ち着いた雰囲気の中、伸び伸びと明るく楽しそうな子どもたちの笑顔と目の輝きが印象的だ。

2歳児の象徴遊びへの導入として「いないいないばあ遊び」と「組み木による大きなかぶ」のお話も集中して良く聴き、反応がとても素直で豊かだ。

3歳児クラスには木製の「ままごとコーナー」と人形・布団・おんぶひもなどの「お世話コーナー」（写真11-1）、ブロック（写真11-2）や積み木コーナー等がある（写真11-3）。廊下には豊かな絵本コーナーがあり、毎週金曜日に貸し出しをしている（写真11-4）。この園では、絵本で共通のイメージを描き、それを構成遊び・積み木遊びに繋げ、友だちと話し合いながら、協同で物語の一部を作成する遊びを大切にしている。例えば3歳児は「ぐりとぐら」を読み込んだ後、作ってみたいものを実際に表現してみる（写真11-5）。

4歳児は「水族館ごっこ」をテーマに、水族館を積み木で作り、海の生きものを工夫して構成した（写真11-6・7・8）。

5歳児は積み木や、ラキューで恐竜を作ることに集中した（写真11-9・10）。協同作業をしている室内は熱気に溢れ、話し合いながら夢中で巧みに手を動かして作業しているので、見学者に一瞥もくれないで自分たちの制作に集中していた。自分でイメージを描き、自分なりの表現方法を考えつき、それを実現させることができるという事は、“創造性ある人間”としての基本的な力である。この力が付いていれば、ことばの世界へも、数の世界へも探検をすすめることができる。反対に感受性や創造性の育っていないところに、知識を注入しても、生きて働かない、個性のない機械のような存在になってしまうであろう。象徴遊び、構成遊びで育んだ力は、子どもたちの前に広がってくる、自然・社会・人間を知る知的探訪の世界に、楽しく逞しく歩みをすすめるであろうことが予想される。

（文末写真11、しおみが丘保育園提供）

〈第8章 注8-1 瀧薫 前掲書 pp.51-54

注8-2 同上 pp.81-83〉

第9章 事物を正確に認識するための「対象的行為」を育み、生活の自立を援ける日常生活練習用具

第1節 日常生活練習の意義

乳幼児期は、自我が芽生え、自分でやりたい、できるようになりたい時期。しかし経験不足なので、やり方がわからない。大人は代行したり、口うるさく干渉したりしてしまいがち。子どもが自分で練習できる対象、時間を保障することが大切である。ものにしっかりかかわり、そのものの本質を自分でつかんでいく「対象的行為」は乳幼児の認識の実質を形成する。そして身体と手指の働きを発達させ、生活の主人公になっていくことができる。モンテッソーリ教育では、日常生活行動を練習することを大事な分野として位置づけている。

興味・関心をもったことを経験してみる→理解する→繰り返す→集中する→ドーパミンが分泌される→神経細胞の樹状突起が伸びシナプスを結ぶ→できた、分った→達成感を感じる→次の興味・関心・意欲へ。

日常生活練習活動の中で育まれる力は次のようなものが考えられる。

- ①生活力 ②目と手の協働 ③手の巧緻性 ④随意筋の調整 ⑤順序性
- ⑥見通し ⑦思考力 ⑧集中力 ⑨自己コントロール力
- ⑩達成感 ⑪自信 ⑫自立と自律の獲得 ⑬自我の形成

第2節 日常生活練習用具の例

モンテッソーリ教育が重視している「日常生活用具」を例示する。 (文末写真12)

第3節 日常生活練習にとりくむ子どもの姿

名古屋市天白区社会福祉法人野並保育園は、「保育所保育指針」を重視しつつ、モンテッソーリ教育理論と実践にも学んでいる園であるが、日常生活練習に取り組む子どもたちの様子を見てみたい。 (文末写真13)

- 〈第9章 参考文献：1）スーザン・メイクリン・ステイーブンソン著、中村博子訳、深津高子監修『デチャでチたできた！』ウインドファーム 2011
- 2）福岡モンテッソーリ教育研究会・未満児部会『0～3歳までの育ちと手助け』学研教育みらい 1993、2014第10刷
- 3）岩田陽子・南昌子・石井昭子『日常生活練習』1977、2010第29刷〉

第10章 事物を正確に認識することを援けるための感覚教具

空想的想像力から科学的創造力への育み

第1節 感覚教育の意義

感覚の敏感期は、運動や言葉の敏感期より少し遅れて、2歳半ごろから始まり、6歳頃

まで続く。この期は感覚が発達し、また、感覚を使う活動に集中するようになる。2歳半から6歳頃の子どもは、感覚の敏感期ならではの鋭敏な感覚で物事を感じとり、その印象を言語化することで、混沌とした世界を整理して把握していく。

大きさ、長さ、重さなどは抽象的なものであるが、感覚と言葉を結びつければ、子どもはそれらの抽象概念を理解できるようになる。感覚を言葉で表現することは、抽象思考への第一歩である。モンテッソーリは、感覚の敏感期である子どもの五感に働きかける感覚教具を数多く考案しており、それらを、「子どもを抽象という大空へ飛び立たせる飛行機のようなもの」と語っている。

第2節 感覚教具の例

モンテッソーリ教育が重視している「感覚教具」を例示する。 (文末写真14)

感覚教具に取り組んでいる子どもの姿を野並保育園にて見てみる。 (文末写真15)

(第10章 参考文献：1) 岩田陽子『感覚教育』学習研究社 1978、2008第24刷

2) 野村緑『自分で考えて生きる力が育つ12歳までのモンテッソーリ子育て』

PHP 研究所 2018)

第11章 まとめと課題

子どもは1歳半を過ぎる頃から、「ジブンデ！ ジブンデ！」と自我を主張するようになる。自立への欲求をほほえましく、頼もしく受け止めながら、身体と手と感覚を思う存分使って、外界を知り、自分づくりをしていく日々を支えたいものである。しかし2歳頃からは、子どもの気持ちを大切に受け止めながらも、危険な事、他の人に迷惑をかけることはしっかりと抑制し、ものごとを聞き分けてもらいたい時には、子どもの感情を受け止めつつ、丁寧に説明することが必要である。3～4歳半頃は、「第二の自我＝社会的に通用する自我」を育む、生活活動や、遊びを十分体験する事が大切である。お当番活動、栽培・飼育活動、ごっこ・役割遊び、構成遊び、つくる遊び、ルールのある遊びなどを楽しむ。4歳半～6歳頃には、自我と第二の自我を自己内対話しながら生きることができるようになる。

「第二の自我」を醸成させるには、次のような活動が必要である。

- ①具体的生活場面での大人の説明や仲介
- ②対物認知：ものにしっかりと関わり、そのものの本質にふれることができる「対象的行為」を繰り返すこと
- ③自然認知：自然界には、人間が無視できないことがら、法則があること
- ④対人認知：兄弟姉妹や友だちと関わる中で、自分以外の人にも要求や感情があることに気づくこと
- ⑤対自己・メタ認知：自分の気持ち、内的な思い、自分という存在に気づくこと

上記の重要な自我の発達を支える上でも、機能遊びのおもちゃ、象徴遊びに誘うおもちゃ、象徴遊びを豊かに彩るおもちゃ、構成遊びを援け、励ますおもちゃなど、子どもの豊かな育ちを支えるために、玩具の果たす役割は非常に大きいことが分った。

子どもは生まれながらにして自ら成長発達していく自己教育力を持っている。発達の過程で、子どもたちがほぼ共通して興味・関心を示す「敏感期」、そして一人ひとりの子どもがサインを発している「敏感期」を見過ごすことなくきめ細かく対応していくことの大切さも分った。

機能遊びから、表象が生まれ、象徴遊びへ、そして構成遊びへと心理的な発展の歩みを捉えるとともに、子どもたちの中に芽生えていく、大人の生活や姿に憧れ、自立・自律への欲求としての、「日常生活活動」の練習ができるような環境と用具を整えてやることも大切なのではないか。

象徴遊びから構成遊びへの発展を豊かに発展させていくためにも、外界を正確に把握していくために、五感を洗練させ、認識力を高める目的で考案されている「感覚教育・教具」の研究も必要であろう。ピアジェが重視した「具体的操作思考期」に対応していると考えられる、手と体を使って理解していく、モンテッソーリ言語教育と教具、算数教育と教具等についても、諸外国で見直され、研究と実践が進んでいるが、日本の保育にとっても、今日重要な研究課題となっているのではないだろうか。

今回改定された「保育所・保育指針」等でも、次のような新たな指摘がみられることを重く受け止める必要があると思っている。

4. 幼児教育を行う施設として共有すべき事項

(1) 育みたい資質・能力

- ア (ア) 「知識および技能の基礎」
- イ 「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- ウ 「学びに向かう力、人間性」

イ 上記は保育活動全体によって育むもの

(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ア 健康な心と体
- イ 自立心
- ウ 協同性
- エ 道徳性・規範意識の芽生え
- オ 社会生活との関わり
- カ 思考力の芽生え
- キ 自然との関わり・生命尊重
- ク 数量や図形、標識や文字などへの関心
- ケ 言葉による伝え合い

コ 豊かな感性と表現

以上

本稿の写真は名古屋芸術大学倫理規定に基づいて、社会福祉法人野並福祉会・野並保育園、北名古屋市東子育てセンター・こあら、社会福祉法人明星会・しおみが丘保育園の了解を得たものである。

〈執筆担当〉

高井芳江 第5, 6, 11章

村田尚子 第3, 4, 7, 9, 10, 11章

野原由利子 第1, 2, 3, 4, 8, 9, 10, 11章

写真1. ドイツ玩具の一例



1. おしゃぶり



2. 音の出るおもちゃ



3. 玉落とし



4. クーゲルバーン



5. 玉落とし



6. かたかた車落とし



7. 引っ張って落とすと鳴る



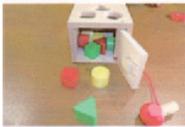
8. たたく



9. たたく



10. 玉入れ



11. 形入れ



12. 型差し



13. ひも通し



14. 円と半円



15. 棒積み



16. サボテンさし



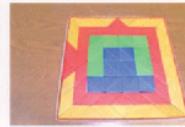
17. フレーベル保育積み木



18. ベグ差し



19. 玉さし模様作り



20. 色板遊び



21. マグネット遊び



22. マグネット模様作り



23. コルクに釘打ち



24. 大工道具



25. 木のままごと道具



26. 森のジグソーパズル



27. 二段のジグソーパズル



28. 積む人型

(名古屋芸術大学所蔵、野原責任収集)

写真2. 乳児用おもちゃ (野並保育園提供)



0-1. モビール



0-2. モビール



0-3. 布ボール落とし



0-4. ボール入れ



0-5. 輪さし



0-6. 輪はめ



0-7. 引き出し入れて引く



0-8. ボール落とし



0-9. 入れて拾う



0-10. マグネット



0-11. マグネット



0-12. マジックテープはがし



0-13. 重いよ



0-14. 車輪まわり



0-15. マジックテープ繋ぎ



0-16. ホックつなぎ



0-17. 引っ張る



0-18. 長い歩き棒



1-1. せんたくばさみ



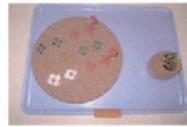
1-2. つまんで入れる



2-1. ピンセット



2-2. はし



2-3. ようじさし



2-4. 鈴入れ



2-5. すくう



2-6. 模様合わせ



2-7. ボタン



2-8. ボタン



2-9. 裏返す練習



2-10. 裏返す練習



2-11. 裏返す練習



2-12. 裏返す練習



2-13. ファスナー



2-14. ホック



2-15. たたむガイドステッチ

野並保育園の乳児のおもちゃ・用具

写真3. 乳児のかんたん手作りおもちゃ



1. がらがら



2. がらがら



3. がらがら



4. ころがす



5. たたく



6. 落とす



7. 落とす



8. 落とす



9. 落とす



10. 入れる



11. 入れる



12. 入れる



13. ばたばた表・裏



14. 引っ張る



15. 引っ張る



16. 引っ張る



17. 引っ張る



18. 通す



19. 通す



20. 結ぶ



21. 結ぶ



22. 結ぶ



23. 開ける



24. 開ける



25. 開けたら出てくる



26. 指人形



27. 指人形



28. 四つ折り紙絵本



29. 四つ折り紙絵本



30. 四つ折り紙絵本

乳児の手作りおもちゃ (野原作成)

写真4. 機能遊びをする乳児の姿 (野並保育園提供)



写真5. フレーベルの「恩物」 1～10



(名古屋芸術大学所蔵・野原由利子撮影)

写真6. ままごと用のおもちゃ (野並保育園提供)



写真7. 象徴遊び・ブロック、積み木など (野並保育園提供)



3歳児 レゴブロック



3歳児 マグフォーマー



3歳児 ブロック



5歳児 ウールレンガ積み木



写真8. 北名古屋市東子育てセンターのおもちゃ



1. ボタンかけ



2. 隠れ遊びうちわ



3. 洗濯ばさみ



4. チェーンリング落とし



5. カラーリング



6. 玉おとし



7. 赤ちゃんコーナー



8. ハイハイコーナー



9・10ままごと遊びのコーナー



11. 編み物キャンディー



12. でんでん太鼓



13. 動物カード



14. 6面体パズル



15. ホックはめ



16. 支援センター



17. 布ブランコ



18・19アンパンマンハウス



20. 凱旋門

写真9. いないないばあ人形の制作と実践



21・22. 人形の製作



23. 紙バックの人形



24. 人形の製作



25. グループで演習



26・27. ままごと遊びコーナー



28・29. いないないばあ人形遊び



30. お話組木遊び

写真10. 3歳児の象徴遊び（野並保育園提供）



1. ごっこ遊び



2. ロケット完成



3. 粘土遊び



4. 描画活動



5. お弁当屋さん



6. 構成遊び



7. ロボット



8. お花



9. 恐竜のフィギア



10. 恐竜完成

写真11. しおみが丘保育園 象徴遊び (ままごと遊び・構成遊び)



1. ままごと道具



2. 構成玩具



3. 構成玩具



4. 想像の世界へ



5. 絵本から構成遊びへ



6. 海のいきもの



7. すいぞくかん



8. カメ



9. 積み木恐竜



10. モザイクステッキ恐竜

(写真提供：しおみが丘保育園)

写真13. 日常生活練習に取り組む子どもの姿 (野並保育園提供)



2歳児 花の水やり



2歳児 ボタンはめ



3歳児 スポンジ絞り



3歳児 雑巾しぼり



3歳児 ネジまわし



3歳児 ピッチャー移し



3歳児 移す (箸)



3歳児 (縫いさし)



3歳児 掃く



3歳児 エンドウの皮むき

写真15. 感覚教具に取り組む子どもの姿 (野並保育園提供)



3歳児 ピンクタワー



3歳児 茶色の階段



3歳児 長さの棒



3歳児 円柱さし



3歳児 幾何ダンス



3歳児 幾何ダンス



3歳児 色板Ⅱ



4歳児 色板Ⅲ

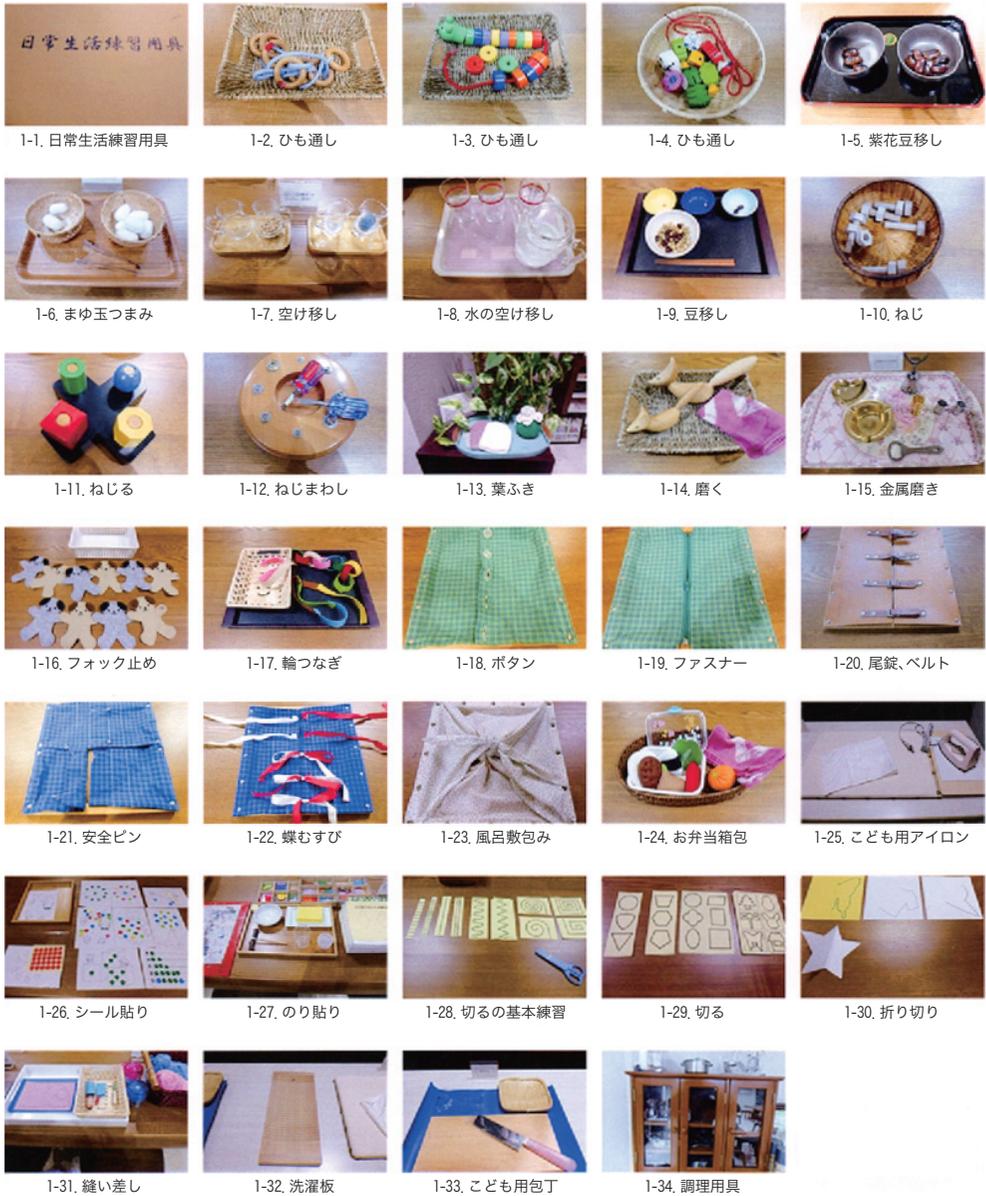


4歳児 構成三角形



3歳児 雑音筒

写真12. モンテッソーリ日常生活練習用具の例



(名古屋芸術大学所蔵・資料作成：野原由利子)

写真14. モンテッソーリ感覚教具の例



2-1. 感覚教具



2-2. 円柱差し



2-3. 円柱差し



2-4. ピンタワー



2-5. 茶色の階段



2-6. 長さの棒



2-7. 色つき円柱の法則



2-8. 色板



2-9. 幾何図形基本



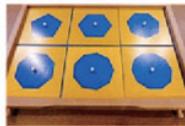
2-10. 幾何図形円



2-11. 四辺形



2-12. 三角形



2-13. 正多角形



2-14. 四辺形



2-15. 曲線図形



2-16. 幾何学立体



2-17. べた塗り、太線、細線



2-18. 構成三角形



2-19. 構成三角形



2-20. 構成三角形



2-21. 構成三角形



2-22. 触覚板



2-23. 触覚板



2-24. 布合わせ



2-25. 布合わせ



2-26. 温覚筒



2-27. 重量板



2-28. 圧覚筒



2-29. 秘密袋素材合わせP



2-30. 秘密袋形合わせp



2-31. どんぐりの分類S



2-32. 木の実の分類S



2-33. 豆の分類S



2-34. 段階識別G



2-35. 比較：羊毛



2-36. 比較：綿花



2-37. 比較：まゆ・絹



2-38. 雑音筒



2-39. 嗅覚筒



2-40. 味覚ビン

(名古屋芸術大学所蔵、資料作成：野原由利子)